

文化

社会主義者から信仰

島根県立美術館(松江市袖師町)の「美術講座」が、七月一日午後二時から同館で開かれる。講座は、同館が所蔵する作品に関する講演会。西洋絵画、日本画、工芸などさまざまなジャンルを取り上げられる予定で、今回は「ギユスターヴ・クールベの風景画―溪流から海へ」と題して、国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学助教授の稲賀繁美氏が講演する。同館が所蔵する「セイ・アン・パレーの水車小屋」「波」は、フランスの画家・クールベの画業をたどる手がかりが得られる作品という。講演を前に、印象主義の画家たちに影響を与えたクールベ像について寄せてもらった。

国では人気を博し、一九二〇年代には第一次世界大戦の好況で、成り金産業ブルジョワを中心としたコレクシヨンが形成される。これら両者のあいだにあって、ブルドンを師と仰いだクールベは、政治的前衛の守護聖人としての地位を固めてゆく。実際ブルドンは「セイ・ヌ川のお嬢さんたち」にブルジョワの退廃とその将来の破滅を予見し「法話の掃り道」にはカトリック権力の腐敗と墮落を読み取った。それに気を良くしたクールベ自らも、いっぽうは社会主義者政治家気取りで、

いなが・しげみ 1957年東京生まれ、広島育ち。東京大学(比較文学・比較文化課程)およびパリ第7大学博士課程修了。文学博士。著書に「絵画の黄昏」「絵画の東方」、編著に「異文化理解の倫理に向けて」(ともに名古屋大学出版会)など。

純粋風景画家へ

今日パリのオルセー美術館には『オルナンの埋葬』『アトリエ』と通称されるふたつの巨大な作品がある。『埋葬』は、完成当時から一八四八年の二月革命と結び付けて解釈され、既成の社会秩序の攪乱(かくらん)を目指したものとされた。また『アトリエ』では左手を占める敵と右手を占める友人たちとのあいだで、クールベが世界に光明をもたらすべく風景画の創造に

勤(いそ)んでいる。一八六〇年代末には、左手の群像のなかの密着者が、クーデターによって第二帝政を起して、たポレオン三世その人に他ならぬ、とする説まで唱えられた。中央の風景画はクールベの故郷オルナンに近いジュラ地方が舞台で、渓谷にはル川の水流が見える。

パリに出てからのクールベは、夏場まではパリで仕事に没頭し、サロンの季節が終わると三人の妹たちが待つオルナンに戻る、という往復を繰り返す。故郷では狩猟の腕前を誇ったり、土地の民謡を収集したり、あるいは翌年のサロン出品作の構想を練る、という生活が繰り返された。ル川の水源近く、泉やせせらぎを描いた多くの作品には、母なるものに抱かれた安らぎと、制作への意欲の源泉に浸る喜びが読み取れる。また山育ちのクールベは、成長して初めて眺めた海に憧(あこが)れ、暴風雨に荒れ狂う波の姿を、パレットナイフに乗せた絵の具を直接キャンバスへと投げ付けるようにして描いた。その制作ぶりからは、

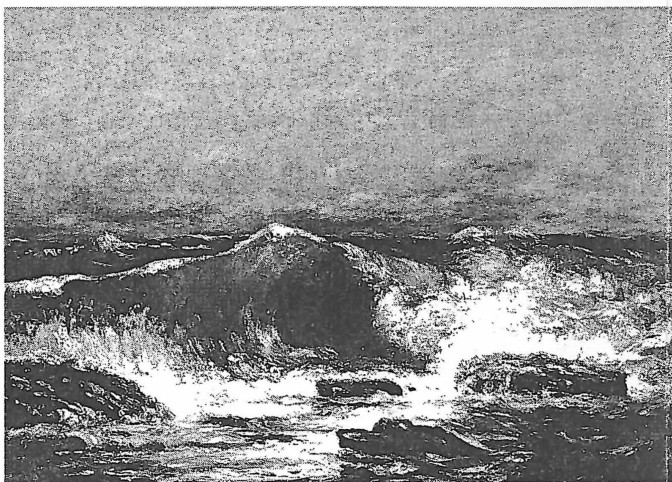
大自然のエネルギーにあやか(あやか)って、自らの肉体をも同化させようとする気迫まで、伝わってくる。

アルプスのふもとからの雪解け水が、溪流となつて下り、やがておおきな流れとなり、最後には海と出会う。クールベその人の画業をこの水流に沿ってたどってみよう。島根県立美術館所蔵の作品は、その格好の手掛かりを与えてくれる。そのなかで、社会主義政治家から純粋風景画家にいたるクールベ像の振幅は、どのような時代背景から形成され、いかなる鑑賞者や美術評論家によって操作され、受容されたのか。それを考えてみたい。

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学助教授)

クールベの風景画
溪流から海へ

—稲賀 繁美—



①ギユスターヴ・クールベ「セイ・アン・パレーの水車小屋」(1858年)②「波」(1869年)③いづれも島根県立美術館蔵